

まちづくりのプロに聞く

# S I B は、教育に非常に有効ではないか。 若者が S I B の仕組みを活用すれば、 モダンなプロジェクトが生まれるだろう

コミュニティデザインの実践に取り組む西上氏。  
まちづくり S I B の課題や促進のための方策について聞いた。

複数年度に亘る事業をどのように作るかが、まちづくり事業の課題である！

■ご経験を踏まえて、まちづくりにおける課題はどのような点にあるとお考えでしょうか

まちづくり事業は、単年度事業で成果を出すことが非常に難しいため、複数年度に亘る事業をどのように作るかが課題だと思います。例えば、初年度に使った予算の出どころと次年度に使った予算の出どころが異なる場合、同じ事に取り組むはずなのに取り組み方を変えなければいけないことが多くあります。

このように、行政の単年度主義に影響を受けることが多いのが実情です。また、次の予算が取れるまでに期間が空いてしまうと、関係者のモチベーションが大幅に下がったり、周囲との信頼関係を再構築しなければならぬなど、本来の取組以外にも注力しなければならぬという問題も出てきます。さらに、**予算の使い方**の柔軟性も課題だと思います。どこに予算をかければよりよい事業になるのかという検討が必要です。

地域密着型の多様な資金調達の仕組みに加えて、お金以外の調達も検討するべき

■まちづくり S I B を実施するにあたって、何が課題になると思いますが

S I B を実施するにあたり、資金を調達するためには、**投資家の意向に合わせる必要**があるでしょう。また、**行政の予算に左右されずに資金を集めることが重要**だと思います。このように**資金調達に課題がある**のではないのでしょうか。地域に密着した形で資金をまとめて調達する方法として、例えば、住民の遺産の一部を地域に寄付する仕組みがあるのとよいのではないのでしょうか。例えば、ご年配の方で周辺に親族がいないために、地域住民が日頃

西上ありさ氏

studio-L TOKYO

コミュニティデザイナー

studio-L東京事務所所長。早稲田大学公共経営大学院修了。公共経営修士（専門職）。

studio-Lの創立メンバー。

2007年から2012年にかけて海士町のまちづくりに携わる。現在は、地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインの実践に国内外で取り組む。



からのお世話や終末期のサポートをさりげなくしている方もいらつしやいます。そのご年配の方が、地域で最期まで暮らせたのは、周辺の地域住民との繋がりが大きいでしょう。親族は、そのような繋がりが地域にあることを知らずに、住居の処分や遺産相続の手続を行い、地域に還元しようと発想することは難しい。そこで、郵便局や地方銀行の口座にある預金の一部を、地域の団体に寄付したり、地域のある事業に還元したりするなど、預金の一部が自動的に地域貢献に使われるような仕組みがあるとよいのではないのでしょうか。この仕組みに賛同して活用する方が、生前に何らかのメリットを受けられるように制度を設計するとよいでしょう。金融商品となるかもしれないません。このような地域密着型の多様な資金調達者の仕組みがあつてもよいと思います。

いと思います。そこで、地域に、自動的にお金が集まり基金のようにプールできるような仕組みがあると、様々な事業が推進しやすくなると思います。さらに、資金だけではなく、土地や建物などの資産もまちづくりに有効に働くと思います。そのような有形無形の資源を集めて、まちづくりに活用することができればまちを元気にするユニークな取組として広がっていくのではないのでしょうか。

地域住民から集まったお金を使つてその事業に取り組み、その後、その取組に効果があつたかどうかを地域住民に評価してもらう。このようなSIBの取組があれば、教育的な効果は絶大だと思えます。同じ取組を法人や大人が行うと、厳しい目でチェックされるでしょう。そのような厳しい目でもチェックされる事業に高い大人は多くありません。一方で、東日本大震災以降、自分が育つた地域が大好きな高校生や大学生が多く、彼ら・彼女らは、地域のために何らかのアクションを起こしたいという気持ちを持っています。そして、その若者が考えるアクションの内容も、**「あがりなものはなく、大人がうなるような発想ばかりです。」**若者の取組を大人が面白がつて応援してくれて、成果の検証も一緒に実施してくる。このような取組があると、若者が「次はこうしよう！」と改善を図つて、地域にUターンしたりして地域の課題に取り組んだり、大学がある地域や自分の故郷で実施した取組について論文を執筆したりするなど、

**周囲の大人に承認され、評価された経験は、ふるさとに帰りたいという思いを強くすることもありますし、ふるさとのない若者が新しいふるさとをつくることにもつながると思えます。**一般的な「ふるさと教育」では、お金について考えていません。収益が生まれたら、成果が検証されたりするというような要素はありません。ですが、たとえば10万円の予算がついただけでも、高校生にとつては非常に大きな意味を持ちます。実際、私が大学や高校で授業を行い、そこで頂く謝金を学生に予算として提供すると、きちんと事業収支を報告してくれます。学生が「地域を元気にするためにこのお金を使つて、これに取り組み、これを成し遂げました！」と発表すると、地域の反応が全く異なります。学芸会の延長だろつと思つて発表を聴きにきた地域住民が、「起業してみれば？」とか「空き家があるから使わないか？」などと反応してくれるようになります。大人がSIBと言う仕組みを活用すると、厳しい視線が注がれますが、

若者がSIBと言う仕組みを活用すれば、規模は小さいけど良い事例、モダンな事例が次々と生まれるはず。なぜなら、生まれた時からITネイティブで、工口な教育を受けていて、経済成長のない時代を生きている若者たちは、モダンなプロジェクトを小さく多く生み出すことに長けているからです。そこにコミットすることこそ、大きな意義があると思います。

**日本の課題はサラリーマンに元気がないこと！？女子高生の面白い発想とは**

例えば、私が東京の女子高校で半年間教えた、地方創生をテーマにした授業では、学生が「日本の社会課題は、高齢化でも少子化でもない。サラリーマンに元気がないこと」だと問題提起しました。私が「サラリーマンが元気になるために、どんなプロジェクトが必要なのか？」と聞くと、彼女たちは、1週間ぐらい考えて、「サラリーマンの髪型がキマってないから、元気がないと思う。朝に髪型がカツ

コよく決まるための支援に取り組みます！」と答えました。このような発想は、大人にはできません。ですが、彼女たちは、真剣に考えて、「髪型がキマっておらずストレスを感じるサラリーマンは、六本木に多いはず」として、髪の毛を整えるグッズをみんな調達し、六本木へ行きました。しかし、女子高生がサラリーマンに声をかけるだけでもハードルがあり、現地でも時間も試行錯誤することとなりました。

結果は、最後までやり遂げました。髪型がキマって嬉しそうに去っていくサラリーマンの姿を見て、彼女たちは、「私たちは、もつとやれるかもしれない。来年はどうしよう？」と考えるようになりました。この取組にかかったコストは3、4千円です。ですが、彼女たちは、日本の社会を元気



▲サラリーマンの髪型をアレンジする女子高生

にするための課題を考えると、その力ギがサラリーマンにあると仮説を立てて、チャレンジして、髪型がキマっていないサラリーマンに声をかける工夫もして、最後までやり遂げました。現在は株式会社を設立したらどうかということまで、話し合っています。このような若者の取組は、聞いていても面白いですし、応援したい気分になります。これをSIBの枠組みに当てはめると、「声をかけたサラリーマンの数」や「サラリーマンの意識変容・行動変容」が成果指標として考えられるのではないのでしょうか。このような規模は小さいけれど面白い事例を多く作って、ティックトックやインスタグラムなどのSNSなどを活用して戦略的に発信すると、若者の間で広がると思います。私は、内閣府の生涯活躍のまちづくりアドバイザーを務めています。その研修会では、大学生・高校生に国内留学の実施を促し、共生・対流を促進したり、都会で生まれ育った子どもに故郷を作ったりする事業について議論しました。ターゲットは高校生、大学生です。地

方創生のためには、若い世代を呼び覚ますことが重要だと思えます。SIBという新しいもの（聞きなれないもの）に取り組み際には、そのフォローアップがインストールされていない若者世代と一緒に取り組むのが良いと思います。

**公共事業に若い世代の現代的な感覚を取り込む**

■まちづくり分野におけるSIBの活用を促進するにあたって国への期待は

たとえば「国土交通省なので、国土保全につながることにSIBを使います」と宣言して取り組み、その国土保全の取組を成人男性が実施するのではなく、これから担う若い世代が考え、若者らしいやり方で実施する。若い世代のいま感覚や考えを公共的な事業に取り込むべきだと思えます。国土計画の検討にあたって、10代・20代のみで考えてみると良いかもしれません。従来の委員とは全く異なる世代の人が委員として議論して、計画策定のあり方から変えることが必要ではないでしょうか。